
SEED-Destiny ~ その歪みを断ち切る！なんちゃって

絶望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S E E D - D e s t i n y その歪みを断ち切る！なんちゃって

【Nコード】

N O 4 3 1 Z

【作者名】

絶望

【あらすじ】

オリ主ではあるがクロスに初挑戦、そして女性主人公にも初挑戦、ロボ物もまた初挑戦……不安になってきた…オリ主は強くないが機体が最強って、チートの範囲に入るのかな？アンチになるか分からないが、とにかく初挑戦が多いので皆の意見を見ながら書こうかと原作破壊は現時点ですつもりはありません。誤字脱字とか文法の違いもあるかもしれませんが、指摘してくれたらありがたい…

まあ後の事は後で、とりあえず純粹種である主人公がGNドライブの暴走で世界を超えて種死と（もし書けたなら）その後を（対話し

ながら）武力介入するオリ話を楽しみましょう！
言い忘れてしまった、種も種死も、シナリオ的に突っ込みたいが、
ほとんどのキャラが好きですので、仮にアンチしても、悪い方向に
は絶対に行かないと約束いたします

プロローグ（前書き）

とりあえず導入…

スターゲイザーの時間軸を勝手に早めたが…んまあ本編にですつも
りは未だないので大丈夫…だよな？

ブローグ

ブローグ

「うつ…」

瞼をなんとか開いて、私はまだすっきりしない頭を何回振った。そしてズキズキする頭を引き摺りながら、状況を確認する…確認…する…

「つてええええ………ね、アルティ…これは夢？」

「残念ながら現実だね、クリス…何なら電気ショックでも？」

私の前に小さな…こー手のひらサイズの人が現れ、こう言った…言い切った。

「遠慮しとくわ…その言い方は現実そのものね」

彼の名はA I L T (A r t i f i c i a l I n t e l l i g e n c e R e s i s t T e s t a m e n t) 私の曾お爺様の代から研究し続け、お父様が完成した人工知能、そしてこの小人はその立体映像なわけ。

レジスト・テストメント…「聖なる契約に反する」

普通のA I との最もたる違いは、完全なる…自我。

私よりちょっと年上で、そ…お兄様みたいに、私の事を可愛がってくれた。だから私はコードネームを拒否し、普段はアルティと呼んでる…普段わね。

勿論名付け親は私で、彼もその名前を気に入ってるみたい。

……でも、その所為でお父様と……ううん、今は考えなくていいの！

「木星に居るはずなのに……アルティ、」

「ふむ……どのセンサーの結果から見ても、金星軌道だな……間違えなく」

それを聞いて、私はほんの少しほっとして、

「太陽系圏内でよかったわ……」

「いや……それは……」

そう、これくらいは一応予想範囲内だった。

さつきも言ったように、私の家は科学者の家系、そしてアルティのほかにも、もう一つの研究を行っている、そして意識不明の状態に陥ったお父様の後を継ぎ、数日前ようやくプロトタイプがロールアウトした。

今日、私は開発者兼テストパイロットとして実稼動を行って……

「やはり多重リンクの粒子放出量が多すぎるのよね「実は……」……過小評価したつもりはなかったけど「言い難いが……」……暴走しちゃうなんて、「いやだから……」帰ったら制御装置の見直しか「あのな……」……アルティ、ツインでランザム起動よ！」

「だから人の話を聞かんか！」

「っ！……ごめんなさい、お兄様……」

一人で舞い上がった所為で、お兄様がキレてしまったようで……
……なによ、わ……悪い？万が一でもお兄様に嫌われたらわたくし……

「あ…いや、俺こそすまん、さすがにこの状況に気が転倒したみたいだ」

（謎の声：仮にだ！仮に、本当にマジキレしたとしても、この縮竈つて涙目且つ上目遣いでうるうるする可愛い子犬（妹）を目にしてなお、怒られる人は居るのだろうか？いやない！反語！）

「よかった…って、え？」

安心と共に、疑問を抱いた。

アルティが…あのアルティが…転倒してる？

「これを見る」

そう言つて、アルティは星間レーダーのスクリーンを出した…

………

「ええええええええええええええええええ…！！？？？」

ない……何処にもない！木星重力圏内に居るはずの母艦も、この間出発して天王星軌道上に居るはずの移民船団も…なんで居ないのよ！？

「そしてこれは光量子レーダーの結果だ」

もう一つのスクリーン、地球―月軌道周辺のスキャンみたい…

「ない…軌道エレベータもスペースコロニーも…代わりに砂時計み

たいなのが…」

そしたらアルティは少し考えて、

「俺の妄想ならいいが…どうやら世界を超えたらしいな…」

「そんなはずは…いや、自乗のトランザムで既に量子化して物理的の連続性を離散させられたのだから…完全じゃないとは言え四乗^{クアドラ}なら更に量子運動を増幅させて…」

またいつもの癖で考え込む私の視野に、1：1サイズのアルティの顔が…

「きゃあー！」

思わず掌を唇に当てて距離をとる私をよそに

「理屈はどうでもいい…ん？」

「なに？…非自然運動体？光学映像から見ると…MSの胴体部かしら…」

「生命反応は二つ、遭難みたいね…どうする？」

ニヤニヤしてる…私の返事なんて分かり切ってる癖に…とりあえずオープンチャンネルで呼びかけ、そしてら女の声が

「こちらD・S・S・D技術開発センター所属のセレーネ・マクグリフよ」

「あはは…ご丁寧にどうも…救助に移るからこちらの事情はあんまり詮索しないでくれると嬉しいな…」

「…わけありみたいね…分かったわ。救助、感謝します、この座標に運んでくれるとたすかります。」

送ってきた座標は、例の砂時計のひとつ…アプリリウス？

「了解した…アルティ、1番2番ツイン接続、トランザム起動！」

「了解、ツインドライブ、オールグリーン。トランザム、起動する。」

「

こうして、西暦3014年、地球人類が異星生命体とのファーストコンタクトから丁度10世紀記念日であったこの日、イオリア再来とまで期待されてる当代GN粒子研究者の第一人者であるクリスフィール・L・イブラヒム（24才）が、敵性異星人に対抗及び対話するため自身が設計した新型MSの起動実験にて失踪、MIA処理とされた事をここに記録する。

そして、彼女の最後の研究テーマである「GNドライブ多重連結システム」は、粒子量により制御不可能と判断され、凍結された。

戦争と言うモノ（前書き）

早くも少しシリアス突入…そんなつもりはなかったのに…
んまあでもシリアスはそんなに多くないので、早めに終える方もそれはそれで…

戦争と言うモノ

プラント、アプリリウス1最高評議会。

ユニウス7の落下により深刻な被害を受けた地球住民に対する援助活動に関する会議が行われ、結論に至り終わりを告げようとするギルバード・デランダルの下に、一つの話が伝われた。

「皆さん、どうやら我々の会議はまだ続かねばならないようだ」

ざわざわ…

「何が起こったのでしょうか、議長」

「実は、先日壊滅したD・S・S・D機関の人員リストで、MIAと記録されてる実験機とそのパイロットが、所属不明のMSによって回収され、プラントまで送られてきたそうだ」

ざわざわ…

「しかし、報告によると確かエネルギー切れの上金星軌道付近に飛ばされた、仮に救助され無事戻ったとしてもこの短時間でどうやって…」

「うむ、それもまた謎の一つだ。そしてそのMSのパイロットから実に興味深い伝言が来たよ…この国の大統領と話したい、と…」

ざわざわ…

「大統領…だと?」「そんな馬鹿な」「プラントが議会制だと知らないはずは…」

「…とりあえず、そのパイロットそこに連れて来たまえ、話はそれからだ」

…

SIDE クリス

「クリスファイル・L・イブラヒムと言ったか、君の話を信じろと？」
↑議員A

「そのような戯れ事を」
↑議員B

「しかし、現に彼女の機体は我々の科学レベルを遥かに超えている」
↑C

…ざわざわ…

まったく、だから議会制は嫌いなものよ、いざという時は何も出来ない…
でも、確かに信じがたい話ね、自分で言うのも変ですけど。

「皆さん、落ち着いてください…イブラヒムくん、君の話を真実と仮定して、君はこれからどうするつもりかね？」

ふん…この人、冷静ですわね…

「今はまだなんとも言えない、少しでも情報が欲しいわね」

基本的な世界状況はセレーネさんから聞いたけど、彼女はあくまで

技術者：私も人を言えないですけど、彼女の知識はあくまで表面上のものであり、それだけではとても判断できないわ。

議長であるその人が何かを話そうとした時、一人の伝令兵が部屋に入り込んだ。

「…申し訳ない、たった今月の地球軍艦隊の動きが確認された、君との話は…」

「…勝手な提案だけど…傍観させて貰ってもいいかしら？」

ざわざわ…

「ふむ…まあいいでしょう、隠すようなことでもない」

「ありがとうございます、デュランダル議長…ですが、やはりどの世界の人間も戦争するのですね…悲しい事ではありますが」

「確かに…悲しいのです、そして軍の動きは一般市民をも動揺させるでしょう…」

なぜだろう…この人、争いたくない、戦争したくないという気持ちに偽りが感じないのに…どこかずれている気がしますわ。

そんな思惑を知るはずもなく、デュランダルは続く

「しかし、やむ得ません…我々の中では今でもあの、血のバレンタインが残っていますしね…」

絶句した議員たちを見ながら、私はそれも仕方がないと思ってしまったのです。

農業コロニーに核ミサイルを撃ち込むなんて、歴史上極悪だった、あのアロウズですらやらなかったのですから…もつとも、工場衛星に殺戮用のオートマタを投入するのも大して変わりはないのかも知れません。

そして…地球軍大統領の宣戦布告…それはこの世界に來たばかりの私ですら、横暴かつ自分勝手としか言えません。

地球軍の展開した艦隊に対し、プラントの守備艦隊も防衛線を敷きやがて両軍のMS軍が次々と戦艦から発し、臨戦態勢に入った。

それと同時に、私は議長や議員たちに付いて司令室らしき部屋に移動した。

平和こそ一番の望みとは言え、デュランダル議長も議員たちも決して平和ボケではなく、冷静な口調で命令を飛ばしてゆく。

「防衛軍の司令官を呼べ、最終防衛ラインの配置は？」

「全市、港の封鎖完了しました」「警報はどうする？」「パニックに備え、MPに待機命令を」「避難を準備しても我々に逃げる場所などないのだよ」

「その通りだ、だからこそ、なんとしてもプラントを守るんだ！」

議長の言葉を区切るの様に、両軍が戦闘を始め、そして…多くの命が散って行く。私は科学者ではありませんが、その原因は敵性異星生命体、戦闘…それも今行っているそれなど比べにもなれないほど残酷な場面を幾度か経験して來ました。

ですが、それでもやはり…人間同士の争いは…辛いものですわね…お兄様…

気弱くなってしまった私は思わずアルティに甘えなくなってしまったのですが、気を取り直してこの世界の二大勢力の力を分析し始めた。

MSや戦艦の推進力はやはりスラスターに頼っている。データ上ではありますが、機動性は精々、改造されたフラッグか、超兵仕様のテエレンと同等…いや、少しだけ上ですわね。GN粒子もないのにビーム兵器が使えるのは流石と言うべきでしょう。総合的な性能は、お世辞でもアヘッドや第三世代のガンダムに至っていませんわね。

ですが、それを覆すほどの量があります。

記録がどれだけ正確かは知りませんが、両方とも当時の連合防衛軍やアロウズと同等以上の数が備わっている…月基地の艦隊、プラント防衛艦隊が全軍の何割かは分かりませんが、少なくとも全部ではないでしょう。

更に細かくすれば、量は地球軍のほうが多いでしょうが、プラントの軍人は皆コーディネーター…量子波を使えない分、戦闘能力はイノベーターやイノベイトに及ばないが、超兵レベルはありますわね。

…

あら…伝令兵の顔色が悪いのですわね、戦局は五分と思いましたのですが…

「極軌道哨戒機より入電、敵別働隊にマーク5型、か、核兵器が確認されました」

「な…」「核だと!?!」「ナチュラル共め」

「数は？」「不明との事ですが、かなりの数が確認されました」

核…兵器…ですって…一度二度ならず、また…なぜ同じ人間にこうも簡単に核なんて…だめですわよクリス、今はとにかく情報が必要で、それにあれに積んでいた技術のどれを取ってでもこの世界にとつて早すぎますわ、過ぎた技術は災厄しかもたらさないもの…だからここは我慢して、プラントの守備軍を信用して、任せて…まかせ…

「任せて堪りますか！いや堪りませんわ！」

ついに声を出し、部屋中に響き渡った私（その発生源）に、全員の視線が集まった。

「デュランダル議長、身勝手を承知の上で頼みます、私に防衛を手伝いさせて下さい」

「いやしかし…本当に頼んでいいのかね？」

「議長！？」「危険です！」「いや、この状況で内通はないでしょう」

「それを見せかけた逃走も…」「漏れて困る情報は知らせてない大丈夫じゃない？」

やはり議会制の弊害は酷いですわね…そう思いながら

「これは私の安全も掛かっているのですから…勿論こちらにも条件がありますわ。一つは、核兵器の阻止以外は加担しません。もう一つ、終わったら地球に行かせる事…心配しなくても核を使うような人の手下はごめんですわ。」

「……………分かった、では早速準備を…」

「必要ないわ…アルティ！」

「やはりこうなったか…しょうがないな、クリスは」

「な…」 「いつの間に…」 「監視は何をやっている!？」

ドン!

「はぁーはぁーほ、報告! 例のMSがいきなり姿を消えて、そしたらなぜか通信が一切通じなく…て…」

「…さすがですね、これが異世界の技術か」

「そういう事、文句とか後でまとめて聞きますから…掃除、行つて参りますわ」

「あ…頼むよ、プラントを、守ってくれ」

議長の言葉が本心と確信しながら、私はコックピットに入り、ハッチを閉じる。

「核兵器なんて…アルティ!」

「分かった。俺もELSたちも準備万端だ…何時でも行けるよ、クリス」

「最終確認…」

…よし。クリスフィール・L・イブラヒム、ダブルオーネクス…ガンダム、発進しますわ!」

S I D E 第三者

ありえない光景…夢なのか、幻なのか…否、それは紛れもなく現実。発射されたミサイルを止めることが出来なく、絶望の叫びを発する者にとつて、それは神の慈悲にも等しい、天使の降臨だつた。

発射したミサイルが反抗の砲火をぐり抜くを見て、歓喜に耽る者にとつて、それは悪魔の嗤いにも見える、地獄の絵図だつた。

一筋の薄い緑の光だつた…それだけのはずだつた。

小さな、また小さな光が最初の光から離れ、そしてその最初の光を除く24筋の光はミサイルの群れに飛び込んだ。

それから何が起きたのだろうか…当時その光の輪舞を見て、生き残った人たちに覚えてるのはただ一つの光景だ。それは、プラントの前で満開する桜色の花火であつた。

S I D E イザーク

満開の桜にはしばらく呆然としたが、プラントの無事を確認し放心した。

俺は、思わずその光を発する何かを見詰めた。

心のどこかでは分かっていた。

それは噂の謎のMSだと。

だが、その時の俺にとって、それは正しく天使そのものだった。

S I D E クリス

大人しく帰ってくだされば、こんな事しなくて済んだ…

ミサイル（希望）があっさり破られ、至福からの転落が原因かは知りませんが、ミサイルを運んできたMS隊は私に向けて攻撃を開始した。

「私は無意味な殺生を嫌いですわ、お引きなさい…

…次に会う時があるとしたら、お話の場であって欲しいですわね」

そして…

…

「そ…私はね、人も、獣も殺すのは嫌いですけど…対話を放棄し獣に成り果てた人を殺すための躊躇いは持ってませんわよ…運がよかつたら、味方に拾って貰えるのを祈りなさい」

24機のELS、GNビットを放出し、地球軍の核攻撃隊を蹂躪し始めた。ビームで貫き、ダガーで串刺し、手足を？ぎ捨て、頭を破壊する…

不殺？冗談じゃありませんわ。戦場に出れば死は平等よ、例えばそれが地球人だろうと、異星人だろうと、液体金属生命体だろうと、戦場では命ほど安いものはないわ…恨まれようが憎まれようが関係ないのよ。

私は対話を諦めるつもりが一切ないが…それでも命は散る、私が奪うのよ…だから、私は例え1%でも生き延びたという可能性を欲しいの…

偽善？自己満足？

言いたければ言えればいいじゃない！罵たいならすればいいじゃない！

私は人間よ、生き物よ、生きるために他の命を奪うのは必然、覚悟もありますわ…それでも私は、生きるためだから、守るためだから、戦争だから……そんな理由で他の命を奪うことを「仕方がない」で片付けたくない！

信念？確固たる信念とかいうモノを持てば人を殺していいって言うの？

言い訳は…しないわ…私はただ、自分の心を守りたいだけよ。どれほど綺麗に包めても、どれほど可愛いリボンで飾っても、私は命を奪ってるのよ…知ってる誰かの夢を守るため、知らない誰かから夢を実現する可能性を奪うの…

罪を背負う？そんな権力誰があるの？そんな資格誰が持つてるの？

背負うつもりはない、でも、私は肯定するわ、罪も、罰も…もし誰かが大切な人を私に奪われて、仇を取りに来るのだしたら、受け止めるわ。全力で抗って、勝ったら、私は私の夢のためにその命を貰う。そしてもしあなたが勝ったら、あなたの目的のために私の命を持って行きなさい。

だからさ……

「いいよクリス…泣きなさい…精一杯泣いて、そして外に出たら笑いなさい、幸せになりなさい。そしてまた泣きたくなったらいつでも来て、俺が…俺たちが受け止めてあげる…クリスを受け入れてくれる人間が現れるまで、ずっと、いつまでも…」

………

………自力でプラントに戻ったネクサスのコックピットから私が出たのは、それから6時間後の事だった

報告によると、核攻撃部隊の生き残りは64の中の11らしい…これを聞かされた私は

「そ…今回は53人を殺してしまったのですね、私…」と呟いただけだった。

私の本当の思惑を読み取れたのは、アルティとどこか悲しそうな表情をして私を見つめた議長以外に居たのかしら…

戦争と言うモノ（後書き）

正直こんな初期でこの告白はないと自分でも思ってる…
そしてこういう告白は読み手の好悪を分けるのよね……

白状すると、書きながら自分でも少し混乱してる、でも終わって読んでみたら、意外とこう言った

「矛盾を抱きながら自分のあり形を探し続き、時には人に甘えて大泣きするような、人間味のある」

キャラが好きかも知れません

設定&アンケート（前書き）

とりあえず、一気にここまで書いて、反応を見てから決めたいと思います

せっかくの休日を使い切ったけど後悔はしませんよ！しませんとも

設定&アンケート

とりあえずエンジェルダウンまでの予定を並べたいと思います

- 1、核攻撃を二回にする、原作中のあれを第二回とする（済み）
- 2、クリスはアスランと入れ違えてミネルバと合流、勿論第一回オリーブ連合戦も参加…とは言えシンのSEEED覚醒は原作通りにする予定
- 3、純粹種の勘が発動して、フリーダムと一度共闘（予定変更、ご都合かつ無意味なため削除）
- 4、純粹種であるが故に、色々な人の心に踏み込む予定
- 5、ミリアにアドバイス…フラグ回収できるかどうか未定（百合ではありません！現時点では）
- 6、ステラは死なせません！（本作初ランザムバーストする予定
- 7、ハイネさんは…ごめんなさい、生かすだけならともかく後の見せ場が全然…
- 8、レイが徐々に心を開く、作者の暴走次第にフラグ（マテ
- 9、ラクスが宇宙行く時援護に入る（ミリアフラグ2

とりあえずこれくらいかな、他にもこれを見たい、あるいはこれは書かないほうがいい、つてのがあるならどんどん言っして下さい、書けるかどうかはさすがに保障できませんが、参考までいろんな意見が欲しい

それと、私はいまだにクリスのあれ（ビシッと小指）を決めてない、

というかすごく迷ってるので、アンケートします

1、トリオの一人とくっ付く（1v1）選んだ場合どいつか書いてください

2、トリオの一人のハーレムの一員になる（マテコラ

3、レイと…（これだと議長から寝取るの確実って椅子は止めて！

4、アルティが人間（バイオ技術の産物）の体を手に入れ…

実を言うと4が初期案ですごく書きたいけど、一番難しい

と言つか、やはり女主人公きついね、男ならハーレムでOKなのに・

・

フラグ立つの結構後ろだから締め切りは決まりません！

ではでは設定行きましょう

クリスフィール・L・イブラヒム（登場時24才の♀）

まず外見

髪：太ももの半分を超える自慢のロングウェーブ 金髪

顔：少し細めの逆三角形

目：ツリもせずタレもせず、普通 瞳はダークルビー（とある先

祖の遺伝子強い…

唇：薄い小さい可愛い三拍子の淡いピンク（っておい最後のはなんだ

身長 157cm（ちなみにハイヒール大っ嫌い
スリーサぶほつ：82/53/88（ナイスバディーな安産って包
丁置いて話し合おう、な？

苗字から誰の子孫か分かるわよね…流石に。その人は誰と結ばれる
事はない、なんて突っ込んではいけない約束

生まれた時点からAILETに見守られ続けてきた、アルティの名付
け親。父とは仲がよかったがとある事件をきっかけに良く喧嘩する
ようになり、最終的にはほぼ絶縁状態のまま、クリスの父が実験での
事故で意識不明になった。

純粹種としての覚醒は6歳前半

他人の前では気高いお嬢様、頼れるお姉さんと振舞うが、生まれて
から、そして6歳からずっと一緒に居たアルティとELSたちの前
では乙女である。特にアルティに対してかなりの甘えん坊な上、と
あるスイッチが入ると従順なペットと変貌してしまう（マテ

ちなみに、アルティは「兄」だが血縁どころか人間ですらないので、
以降どう発展するかは検討中

勉強は中の上、どの科目も平均的で7割くらいの点数ではあるが、
大学に入り、量子物理学及びGN粒子に関する理解力、分析力共に
ずば抜けており、21才でGN粒子の研究者として一目置かれる存
在となっていた。

同年、地球は新たな異星生命体を発見との消息を光量子通信で知ら

された。

同年、敵対意思を持った例の異性生命体は地球に侵攻、数世紀に渡り戦争と無縁なため兵器の研究が止まっており、仕方なくクリスは実験用のツインドライブ機体で幾たび出撃し、苦戦を強いられた。その上ツインドライブの粒子量でも当異性生命体との対話に足らず、新たなGNドライブが課題付けられた

翌年、戦備が一段落し、戦況は膠着状態に。クリスは思わぬところ父が残した研究レポートを発見、着手し、同時に木に旅立つための準備を始める

翌年、「GNドライブ多重連結システム」の基礎理論が完成、クリス木星へ

翌年、新型GNドライブを製造する時間がなく、旧式を量産し実験機ネクススを完成、そして…

続いてオリジナル機体行きまーす

ダブルオーネクス

ダブルオーシリーズ正統後継機

高さ 18・6m

重さ 68・2t（↑全身ELS金属なんで仕方ない…よね？

装甲 ELS-GNコーティング

動力 初期型GNドライブ8基（ですがツイン以上リンクすると暴走確率大

で作ったので

それから旧式とは言え多重リンクの前提

特殊 構成ELSは全部クリスの幼馴染、故に実質上彼女以外動かせない

ELSの力で実弾兵器一切無効どころか吸収される…

交代制で理論上ツインドライブトランザム常時稼動可、Gを耐えられるなら

武装

メイン格闘：

ELS接近ブレード 2本 左腰「白桜」

右腰「黒椿」

日本刀型鞘付き。が、変異性金属なので刃を消す事も

可能

メイン射撃：

ELSハウリングランチャー

ライフル
Rモード

中・遠距離

射撃

マシンガン

Mモード 近・中距

離連射

バズーカ

Bモード 中、遠

距離砲撃

スナイパー

Sモード 遠・超遠

距離狙撃

ランチャー

Lモード 遠・超遠

距離砲撃

ELS-GN斬艦刀

「グラム」

(言わずとも武神装

攻 変異性金属なんでry

GNビームサーベル×2

GNビームダガー×4

最後の武装はぶっちゃけチート…

ELS-GNビット×??

(正直数はどの辺が適当が分からん

詳細：ミニ型GNドライブ搭載(実は新型を開発する時、火種が小さすぎて…

変異性金属なため(またかよ)2つで1つに融合でき、

その場合ツインドライブ、勿論更なる融合も可能だが、同じくツイン以上は暴走可能性大

設定&アンケート（後書き）

復唱します

もしも、

このような話を見たい、とか

このような話はやめ！とか

この話は要らない、とか

意見、アドバイス、突っ込み、全部受け付けますのでどんどん来て
くださいませ

地球に向かう（前書き）

いきなり戦場です…

正直第三視点に慣れているので、主観の書き方が難しい…

んまあ戦闘については、基本的に原作を少しだけ変えてクリスを介入させるのがメイン…少なくとも前半は

私は主に日常的に純粹種の介入により影響される各々の思いを書いてみたいと思います

地球に向かう

「感謝する、君が居なければ、今時プラントは壊滅したのでしょうか」
極秘裏の格納庫に誘導されるも、コックピットで6時間籠ったにも拘らず、何一つ聞かずにそう言いました。

その心遣いを有り難いと思いながらも、やはり何か引掛かりますわね…

……

人の心、分かるはずがないと言えばそこまでだが、時にはそれ以上にならない純粹である。

プラントの絶体絶命（あの時は既にミサイルを止められる機体はないそうだ）を救ったことで、完全ではないが、議員たちの疑いは大分消えたようだ

「これから地球に行くつもりだったね、何をするつもりかは聞いていいのかね？」

「そうね、今この世界の軍事力はほとんどプラントと地球連邦で二分しましたが、中立国、それも影響力のある国が存在している…そこに行こうと思っています」

「オーブですか…まあ、あのオーブの姫様なら君を受け入れるでしょうし」

「勘違いしないでください、安穩を求めて言ってるわけではありませんわ。私はこの世界を知りたい、そして現状で、あなた達の話だけが真実ではありません」

ざわざわ…

煩いわね、せつかくさっきの対応で少し見直したというのに…

「…なるほど、確かにそうでしたね。しかし、この世界での身分もないのでは、色々と不便なのでしょう、特に君の場合MSも持っているから」

「本題を話して下さらない？こう見えても、それなりの場数を踏んだのよ」

「ふむ、いいでしょう…私は、君を我が軍の、特務隊の一員として迎え入れたい」

「議長！？」「特務隊って」「流石にそれは…」

ざわざわ…

どうやら、その特務隊はザフト―プラントの軍では特殊の存在ね…名前からでも分かるけど…とにかく聞いてみましょう…

「特務隊FAITH、軍の指揮系統に囚われず個人単位の行動が許され、通常の指揮官を上回る権限をもつザフトのトップエリートだ」

言いながら、議長は一つの四角い箱を差し出す…中身は白い羽のバツジみたいね。

この手際によさ、最初からそのつもりかしら…

「いきなりそんな身分なんて、随分と酔狂なのですね」

「なに、先ほどの戦いだけで戦績は十分ですし、何より信念のある人と見えている…フェースはザフトに忠誠を誓うが、君は自身の信念に誓えばいい」

やはり、分らない人…悪意を感じられない、嘘もついていない、にも拘らず純粹種としての勘は何か引つ掛かつてる…

でも、信念と言われた以上、私としては引けないし引きたくありません。戦いながらも対話を諦めず、E L Sと人間の平和を築いたご先祖様は私の誇りであり、彼のように新たな平和を対話でもたらすのは私の…

…

「そうだ、言い忘れたが、我が軍の最新鋭戦艦は今オーブに居るのでね、必要ならば乗って構いませんよ」

「その代わり手伝え、でしょう…分かりましたよ、場合によるけどね」

「ふふ、感謝するよ」

結局、私はフェイスのバッジを受け取り、名目上ザフトに一員となりました。それに伴い、ネクススも最新鋭の実験機として登録された…勿論データは全部ロックします。

そして私はザフトレッドのパイロットスーツで身を纏い機体に取り…

「こちら管制塔、発進許可が下りました。全整備員退避完了、エアロック解除、ハッチ開放、システムチェック…オールグリーン。ダブルオーネクスス、発進どうぞ」

「了解しました、ダブルオーネクスス、行きますわ」

G N粒子の散布を最小限に抑え、推進力を生み出す…この世界で無闇に粒子を撒いたら大惨事ね、注意しなければ…

プラントの人工重力を振り切り、私は地球に向かいました、待つて

いるのは新たな戦場とも知らずに…

S I D E ???の思惑

対話による平和の実現…確かに素晴らしい事だ。
その信念が実れるかどうか…期待させて頂こう、イレギュラー…

S I D E ミネルバブリッジ

「艦長！味方と思われる機体から通信」

「味方？繋いで」

「はい」

「こちらフェイス所属、クリスフィール・L・イブラヒム、状況の説明を要求する」

……

S I D E クリス

なによ、これ…

オーブは中立じゃなかったの？

なんでオーブの艦隊が地球連合と一緒にミネルバを攻撃してるの？

ミネルバの通信回線は確か…

……

「こちらミネルバ、艦長のタリア・グラデイスよ…一言で言えば、オーブの地球連邦参加するための生贄に選ばれたのよ、私たち」

「シン！」

通信兵の声は焦ってる、仲間の誰かが危険って事かしら…

レーダー上、敵陣の中に味方信号が一つ…急いでメインカメラを向けると、

「ミネルバ、メイリン！デュートリオンビーム！それから、レッグフライヤー、ソードシルエットを射出準備」

…それから、一方的の蹂躞劇だった。給電システムで補給を受けた、インパルスと呼ばれたそのMSは敵大型MAの砲撃を盾で受け流し、ビームサーベルで胴体中央部を貫き、撃墜した。

そしてミネルバから射出した換装パックでソード戦装備に変え、二本に対艦刀で敵の艦隊に切り込み、振り回す…結果から話すと、空母2護衛艦4撃沈した。

あのパイロットはいつもあの調子なら、最初から苦戦しないのでしょう…ましかしたら、変革を…いえ、脳量子波を感じないし、変な感じがする、別の何かかしら…

インパルスはオーブ艦隊を睨み付けたが、正式の連邦参加声明がまだである以上、領土を守るという建前がなければ攻撃は出来ないでしょう…

…

「っ！」

一瞬の感じだった…そしてその正体は次の瞬間明白になった。

S I D E シン

「アラーム！？ぐああ」

オーブの艦隊が動かないので、俺から攻撃すれば今度こそ外交問題、ここは抑えるべきだと、原因は分らんが脳が異常にクリアーしてる今だから分かってる。

でも、だからこそ一瞬気を抜けた事を後悔した。

そのツケはこれ以上にならない形で突き付けられた…撃墜したと思ったあのMAに掴まれ、そのまま空中まで運ばれ、衝撃でエクスカリバーも落とした。

ソードインパルスは陸戦用、脱出できる推進力は持っていない、武装はCIWSを除けばフラッシュエッジだけ…そもそも手も掴まれただので使えないか。

ミネルバの艦砲では援護にならないし、ルナは射撃苦手だし、レイは今死角に居る…万事休すとは、正にこういう事ね…

嫌だな…脳がクリアーしてるせいで、逆に何をしても無駄だと知らされたよ…

「こんな所で死ぬのは嫌だけど…今行くよ、お父さん、お母さん…マユ」

視野を占拠する赤い光と全身に伝わる衝撃の中で、俺は……声が聞こえた…

「死ぬのはちょっと早いよ、あら？フツ…お休みなさい、ボウヤ」

「なにが、起きたの？」

記憶に残ったのは、優しい女の声と、ルナの声だった…

S I D E クリス

「この距離…トランザム！」

っ！やはり重力下のトランザムはきついすわね。
ですが…負けて堪えますか！

瞬間加速、右手抜刀…白桜の一閃でM Aのクローを切り落とし、ハ

ウリングランチャーRモードで打ち抜く。武器を収めながら急降下し、インパルスをキャッチし、トランザム解除。私ながら二年ぶり実戦運動でよくやるわ…この前？あれは全部ビットで片付いたからカウント外だわ。

あら？インパルスのパイロットが気絶してしまったわね…さっきの声から聞くと未だ15、6歳くらいだから、仕方ないかしら…

…お疲れ様、そしてお休みなさい…

…

インパルスを抱えてミネルバに着艦し、パイロットの少年が救護兵に運ばれるのを見届いた後、私は伝令兵に艦長室まで案内された。

さすがに「異世界から来ました」なんて誰にでも言うわけにはいきませんので、デュランダル議長が準備したカバーストーリーを話す事にした。

「…なるほど、戦局の進行に備え、未完成の技術まで投入した実験機のテスト、ですか…正直に言くと、あの人らしくないですわ」

デュランダル議長をあの人、でしたか…純粹種ならぬ女の勘では、この艦長さんは議長と並みならぬ関係だと言っていますわね…

「はい、ダブルオーネクサスのコンセプトは、戦場制圧から要塞攻略まで、あらゆる戦場において単機完遂です。勿論ほとんどの技術が開発途上で、危険も承知の上です」

「では、あそこに居たのは本艦と合流するために？」

「いえ、私がオーブに向かうのは議長から預かった任務のためですが…オーブが連邦参加を決めたのでは意味がなくなりましたわね…ですが、こうなってしまう以上、母艦なしでは困難のため、このままミネルバに乗艦したいと思っています」

「…分かりました。ではこれから本艦は、貴女の指揮下に入ります」

…それでは困ります！場合によれば単独行動、最悪ザフトを離れる事も…

「いえ、私がフェイスになったのはあくまで機体テストのための処置であり、私自身も軍人ではなく科学者です。行動に自由さえ認めてくだされば、私は艦長である貴女の指示に従うつもりですわ」

「…本当にあの人らしくないわ…とりあえず分かったわ。クリスフイルさん、作戦行動外の完全自由を認める、ただし作戦ブリーフィングは必ず参加して頂戴」

固いですわね…仮面を付けている感じで…なるほど、この年で艦長、身内人事ではないとしても…いえ、そうでないからこそ、いつも長官として自分を律してるでしょう…

「ええ、それで構いませんですわよ…それと、こちらの方が年下ですし、私のことはクリスと呼んでください、タリアさん」

ちょっと突然すぎたかも知れませんが…ですが予想通り、タリアさんは少しの間呆然しましたが、ほんの少しだけ微笑んで、

「ええ、分かったわ、クリス」

……

自室に向かう途中、先ほどの通信兵と出会い、私は居住区のロビーまで連行された。

……

「本艦は間もなく、カーペンタリア基地に到着します。艦体修理のため、滞在中上陸を許可します。繰り返す……」

「もう夜12時だからこんなアナウンスなんて明日でいいのに……」

ようやくロビーから解放され、自室に戻りシャワーを済ませてベッドにダイブする私はかなり意味不明の文句を吐く……少女少女たちの質問攻めに疲れ切ったのも原因、いえむしろ主因ですわ……

「とにかく今日はもう寝ますわ！お休みなさい、アルティ」

「ああ、おやすみ、クリス……」

地球に向かう（後書き）

さて…

今回は少し時間が足りないので、クリスと少年少女たちの会話は幕間でする予定たすわよ

そしてカーペンタリア基地上陸期間にもいろいろ書きたいのですが、ネタに悩むわ

ってクリスの口調が移った！？どうしよう…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0431z/>

SEED-Destiny ~ その歪みを断ち切る！なんちゃって

2011年12月3日18時04分発行